



## 特集 魅力ある図書館（図書館自慢）

### 図書館員の片恋

中尾 明子

#### I. はじめに

「魅力ある図書館」って、なんて魅力的な響きなのでしょう。自画自賛であっても私の仕える日本赤十字豊田看護大学図書館（以下、当館）を魅力的な図書館と言えるかどうか、全く自信がない。「魅力ある女性」いえ、「魅力ある図書館員である私」とは言えないように。それは私が慎ましく、謙虚であるからではない。「魅力」は遠くて、手の届かない高みにある言葉に思えるからである。

CiNiiで「魅力+図書館」で検索すると184件（2009年9月28日検索）もある。館種こそ違え、雑誌「医学図書館」から「薬学図書館」、当館が所属する日本看護図書館協会の「看護と情報」、「学校図書館」、「図書館雑誌」、〇〇大学の「図書館報」に至るまで論文記事が発表されている。どれだけ「魅力ある図書館」という言葉に図書館員が魅せられて、特集を組み、記事を書いてきたか。

まるで幻の恋人を夢見るようである。

#### II. 図書館ねこデューイ<sup>1)</sup>

##### —図書館員の戦略—

猫の名前は「Dewey」。言わずと知れた「デューイ十進分類法」にちなんだ名前である。姓名はもっと魅力的である。「Dewey Read more Books」。実際にアメリカアイオワ州のスベンサー公共図書館で飼われていた猫と、図書館長の話である。

この本が日本で発行されたとき、私の所属す

るメーリングリストで話題になっていたし、ワーキンググループの会場としてある医学図書館をお借りしたとき、その職員休憩室には、この本がテーブルに置かれていた。開けば、「図書館員の複数の予約が優先されている本である」とのこと。もちろん、私も新聞の書評を読んで、既に関心求めていて、若い同僚にも読ませた。「猫はともかく、図書館員としての計画実行力、交渉力がすばらしい」と。読後、この本を当館に寄贈したが、図書館員にはウケるが、果たして図書館利用者に読まれるだろうか、と密かに心配をしていた。だから、学生の貸出手続きに私自身がかかわれたときは、とても幸運に思え、その日は一日嬉しかったものである。

さて、デューイが図書館員にウケた訳はどうしてだろう。奇しくも本文にはこう書かれている。

返却ボックスから子猫をとりだしてから二十分経過していたので、わたしにはいろいろなことを考えるだけの十分な時間があつた —図書館で猫を飼うことはかつて当たり前だったこと、図書館を友好的で魅力的な場所にするために進行中だった計画のこと、水のボウル、えさ、猫のトイレに関する実際的な計画…

（下線は筆者。）

また、図書館の改装費を市議会に要求するときの交渉のやりとりはこうである。

「図書館にお金？それでどうするんだ？われわれには仕事が必要なんだよ、本ではなくて」

なかお めいこ：日本赤十字豊田看護大学 図書館  
nakao@rctoyota.ac.jp

「図書館はただの倉庫じゃありません」わたしは市議会に訴えた。「重要な地域社会の中心なんです。職業斡旋の情報、会議室、パソコンを提供しています」(中略)

「ところで、図書館は何のためにお金が必要なんだね？すでに本はどっさりあるだろう」

わたしは彼らにいった。「舗装したばかりの道はすてきですけど、地域社会の精神を高揚させません。暖かく歓迎してくれる友好的な図書館のように。誇りにできるような図書館があると、人々の志気があがると思いませんか？」

「正直にいおう。よりきれいな本があるからといって、ちがいができるとは思わないね」

しかし、面白いことにデューイが事態を変え始めるのである。

利用者数が増えた。人々は以前より長時間、館内で過ごすようになった。幸せな気持ちで帰っていき、その幸福感は家庭に、学校に、仕事場に持ち帰られた。さらにすばらしいことに、人々は図書館の話をさかんにするようになった。(中略)

「ヴィッキー」とうとう市議会はいった。「もしかしたら図書館はちがいを生むかもしれないな。きみも知ってのとおり、現在、市の財政は逼迫していて、お金が全然ないんだ。だが、きみが基金をつるのなら、われわれは支援するよ」たしかに、たいした申し出ではなかったが、長い長い年月で、それは図書館が市から得た最大の援助だった。

「こんなマジカルキャットがいたら…」もしくは「いっそ自分が猫になりたい！」と、利用者に愛される図書館を目指して、日頃腐心している図書館員は思ったのではないだろうか？私のように。しかし、たとえ猫がいなくても、目標とするキーワードは簡単な言葉で本文に散りばめられているのである。

### Ⅲ. としょかんライオン<sup>2)</sup>

—こんな図書館があったら—

こちらは世界中で多く読まれている(と、帯に書いてある)絵本である。大人が読んでも面白いのだが、子どもに人気があるのだから、利用者にとって「こんな図書館があったら」と思わせるのでないだろうか。そして、「そんな図書館」をめざしたいと思っている私は、この絵本に惹かれるのである。

ちなみに CiNii で「利用者+魅力+図書館」で検索すると9件と、ぐっと減る。もっとも、「利用者にとって魅力ある図書館」とググれば65万件もあるのだが。

さて、絵本の図書館のモデルは正面玄関にある2頭のライオンからニューヨーク公共図書館であるらしい。ニューヨーク公共図書館といえば「未来をつくる図書館」<sup>3)</sup>で紹介され、研究者・地域住民双方への徹底的なサービスで、利用者にとっても図書館員にとっても憧れの図書館である。そこにライオンが現れ、えほんのへやで寝てしまうことからお話は始まる。表紙には、図書館内でライオンの前足の間で絵本を広げる女の子とライオンの背に体をあずけて絵本を読む男の子が描かれている。おそらく、子ど



「としょかんライオン」ミッシェル・ヌードセン作  
岩崎書店

もはライオンの温かな体温を感じながら、安心して本を読んでいるのだろう。動物療法のように、動物の少し高めの体温は五感から満たされた気分になって、明日も図書館に来たいと思うであろう。

そう想像すれば、利用者が満足するなら、ライオンの着ぐるみを着て入館者をハグして迎えたり、送り出したりするサービスを、と本気で考えてしまう私がいる。

#### IV. 哀しい片恋か

当館は流行りのラーニングコモンズとは無縁、全文データベースもない。清潔で整理された温かな環境を心掛けることしか能がない。三無い尽くしであるが、他大学図書館を利用した学生や、異動した教員から「ここは資料が探しやすい」と言われると、リップサービスでも社交辞令でも、ありがたくそのまま頂戴することにして、勝手に明日への活力にしている。笑顔で利用者に挨拶をし、日野原重明先生提唱の「人の耳には“ラ音♪”が心地よいので、ラ音で話しよう」かつ、有能なコンシェルジュが理想である。

と、ここまで述べてきて不意に寺山修二の「家出のすすめ」<sup>4)</sup>を思う。

親の愛情、とりわけ母親の愛情というものはいつもかなしい。いつもかなしいというのは、それがつねに「片恋」だからです。

利用者のことを常に考えてはいるが、片思いに過ぎず、実は利用者には届いていないのだろうかと。

P.S. 本当は、ここで終わろうと思っていました。しかし、自己愛的に終わっては、読んだ方に元気を分けて差し上げられず、「病院図書館」

にあまりにも失礼です。それで、Googleで偶然拾ったエッセイ「図書館の窓を開いて」の紹介をします<sup>5)</sup>。作者は不明です。

本を読むのが好き。図書館が好き。

図書館を利用して15年。図書館が欲しいと〇〇県〇〇市で図書館作りの応援をし続けて10年。このたび司書資格を取りました。図書館を知れば知るほど、図書館の魅力に引き込まれます。そして思うのは「図書館の底力はまだまだこんなもんじゃない。もっと素晴らしいものだ」ということ。この魅力が、なぜ利用者に充分伝わらないのか、評価されないのか不思議です。最近、その原因が気になって仕方ありません。

「知識と情報を提供する図書館」がもっと利用者の使いやすい、価値あるものになるように何かお手伝いできることはないかという思いで「図書館の窓を開いて」を書いています。図書館がもっと利用者と心を通わせてほしいと思います。

やっぱり日本人はナイーブで、図書館と利用者は、互いに片思い。この恋を何とか実らせてあげたいと言うおせっかいなエッセイです。

初心忘るべからず。続きは長〜いです。ご自身でググってこの続きをお読みくださいませ。

#### 参考文献

- 1) Myron Vicki. 図書館猫デューイ. 羽田詩津子訳. 東京: 早川書房; 2008. p. 14, p. 72-4.
- 2) Knudsen Michelle. としょかんライオン. Hawkes Kevin 絵. 福本友美子訳. 東京: 岩崎書店; 2007.
- 3) 菅谷明子. 未来をつくる図書館. 東京: 岩波書店; 2003.
- 4) 寺山修二. 家出のすすめ. 改版. 東京: 角川書店; 2005. P.37.
- 5) としょかん発見塾. 図書館の窓を開いて. [引用 2009-10-01] [http://hakkenjuku.at.infoseek.co.jp/mado\\_wo\\_hiraite.shtm](http://hakkenjuku.at.infoseek.co.jp/mado_wo_hiraite.shtm)